HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学のコアカリキュラムに関するアンケート調査
Author(s)	小笠原, 正明; 細川, 敏幸; 西森, 敏之
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 15, 133-145
Issue Date	2007-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.15.133
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33025
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1511.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学のコアカリキュラムに関するアンケート調査

小笠原　正明[1)], 細川　敏幸*, 西森　敏之
北海道大学高等教育機能開発総合センター

Results of Questionnaire Survey about Core Curriculum in Hokkaido University

Masaaki Ogasawara[1)], Toshiyuki Hosokawa** and Toshiyuki Nishimori
Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University

Abstract — The year 2005 was 5 years after the change of the freshman curriculum named the core curriculum in Hokkaido University. The objects of this new curriculum are to (1) improve communication skills, (2) understand diversity in culture and society, (3) develop creative and critical thinking abilities, and (4) acquire awareness of ethical issues and social responsibility. To make the curriculum better, a questionnaire about educational effects was distributed to all students. This survey was conducted in October 2005. The results showed that (2) was developed but had not progressed to (4) via the core curriculum, but (2) and (3) were not effected. Ethical issues and social responsibility are the next educational issues in Hokkaido University.

(Revised on 9 May, 2007)

1．はじめに

2005 年度は，北海道大学において旧教養課程が廃止され新しい全学教育がスタートしてから 10 年目，全学教育の教養教育カリキュラムがコアカリキュラムに切り替わって 5 年目の節目の年度であった。

コアカリキュラムは，1）コミュニケーション能力の育成，2）人間や社会の多様性の理解，3）研究の一端に触れながら独創的かつ批判的な能力を養う，4）社会的な責任と倫理を身につけること，を目標に設定している。この新しいカリキュラムをより良いものにするためには，教育効果に関する具体的で信頼性のおける調査結果が必要である。

高等教育機能開発総合センターの高等教育研究部は，かねてから教養教育の効果を正しく評価するためには，中長期にわたるアンケート調査および聞き取り調査が必要であると考えていた。今回，教育改革室および学務部教務課の全面的な支援のもとに，学部学生を対象としたアンケートおよび記述式の調

*) 連絡先：060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 北海道大学大学高等教育機能開発総合センター
**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo, 060-0817, Japan
1) 現職：東京農工大学・大学教育センター　教授

査を行うことができた。これは，15 年間におよぶ定点調査の初回と位置づけられるべきだろう。

2. アンケート調査の目的

このアンケートは，学生が教養教育をどのように受けとめているかを知り，カリキュラムの目的と学生の受けとめ方との整合性を調べることを目的とした。また，今後のカリキュラム策定の参考とするため，学生にとって印象的だった授業をピックアップした。さらにこれらの情報は，カリキュラムの構造的な問題をさぐる材料となる。

3. アンケートの対象と調査用紙の配布および回収の方法

このアンケート調査の対象は，平成 17 年 10 月現在において学部 4 年目に在籍するすべての北大生であり，アンケート用紙は全員に配布した。

質問項目（資料 1）は，1998 年度における全国調査（科研費研究「大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究」代表 有本章（広島大学））のアンケート調査項目を一部踏襲し，過去のデータと比較しやすいようにも配慮した（有本 2001）。

実際には，平成 17 年 10 月にアンケート用紙の配布を各学部の事務に依頼し，用紙は窓口および必修科目の授業において配布された。各学部での配布方法は次のごとくである。

まず，文系 4 学部では窓口で履修届の受付と引き替えで配布した。獣医，医，歯学部では，必修の授業で配布した。工，理学部では各学科の事務で配布した。回収は 11 月末日を締め切りに，各学部の窓口および郵送で行った。各学部毎の回収率は表 1 の通りである。

4. 分析の方法

データの検定には，ノンパラメトリックな手法による符号検定を用いた。

問 7 に関しては，「6- 点数」が 3 より高いか低いかを検定，問 8 に関しては，点数が 2.5 より高いか低いかを検定した。

表 1．学部ごとの回収実績（回収率 34.6%）

＜学部名＞	＜回収数／対象者数＞
文学部	59 ／ 267
教育学部	18 ／ 69
法学部	99 ／ 318
経済学部	71 ／ 228
理学部	99 ／ 328
医学部	38 ／ 110
歯学部	37 ／ 59
薬学部	31 ／ 78
工学部	258 ／ 806
農学部	125 ／ 250
獣医学部	20 ／ 50
水産学部	103 ／ 213
計	958 ／ 2776

5. 結果の概要

以下に項目別の検定結果を，ポジティブな回答とネガティブな回答に分けて列記する。

なお，* マークは次のような意味である。

**: 危険率 1% 以下で有意な差が認められた。

* : 危険率 5% 以下で有意な差が認められた。

対象が同一の集団なので平均値からのずれも表示した。

5.1 理念にかわる質問項目（問 7）への回答の傾向

図 1 に学部ごとの平均値を示す。縦軸の意味は,「非常に影響があった :5」から「全く影響がなかった :1」までの五段階尺度である。

・ポジティブな回答が得られた項目（かっこ内は連続変数と考えた場合の 3 からの平均値のズレ）

a （0.659**） 幅広い知識を身につけること
g （0.648**） 新しいものの見方にふれること
b （0.353**） 社会問題に関心をもつこと
j （0.330**） 探求心をもつこと
f （0.303**） 価値観や社会観について考えること
c （0.174**） 自然や宇宙への関心をもつこと

・ネガティブな回答が得られた項目（かっこ内は連続変数と考えた場合の 3 からの平均値のズレ）

a （0.659**） 幅広い知識を身につけること
m （-0.783**） 奉仕的精神を養うこと
i （-0.790**） 自分に自信を持つこと
k （-0.508**） 他者に対する寛容性をもつこと
e （-0.307**） 自分の将来について考えること
h （-0.305**） 社会常識を身につけること
l （-0.248**） 倫理観を養うこと

・どちらとも判断できない項目

d 芸術や文化への関心を持つこと
n 批判的精神を持つこと

図 1．理念に関わる質問項目（質問 7）への回答の学部ごとの平均値 （つづく）

図 1．理念に関わる質問項目（質問 7）への回答の学部ごとの平均値 （つづく）

図 1．理念に関わる質問項目（質問 7 ）への回答の学部ごとの平均値 （おわり）

5.2 スキルにかかわる質問項目（問 8）への回答の傾向

図 2 に学部ごとの平均値の分布を示す。

- ポジティブな回答が得られた項目（かっこ内は連続変数と考えた場合の 2.5 からの平均値のズレ）
  - h（0.197**） ものごとを総合的に判断する力
  - b（0.171**） 文章で事実や自分の考えを説明する力
  - f（0.159**） 知識と現実とを結びつけて考える力
  - g（0.154**） 論理的な思考力
  - c（0.047*） プレゼンテーション（人前で発表する）能力

- ネガティブな回答が得られた項目と平均値（かっこ内は連続変数と考えた場合の 2.5 からの平均値のズレ）
  - e（-0.239**）数理的な処理能力
  - i（-0.187**）ねばり強くものごとに取り組む力
  - d（-0.034**）他人と議論する力

- どちらとも判断できない項目
  - a　文章を読んで理解する力

図 2．理念に関わる質問項目（質問 7）への回答の学部ごとの平均値 （つづく）

図 2．理念に関わる質問項目（質問 7 ）への回答の学部ごとの平均値 （おわり）

5.3 「思い出とご意見」（問 9）に対する回答の傾向

「問 9. 今も記憶している全学教育の科目名」は記述式の回答を求めていたが，全回答のうちの一部分だけを表 2 に例示する。この問いに対する回答に一般教育演習（少人数ゼミ）を挙げている学生が多かったことは特筆に値する。この 10 年の間に，教養教育改革の柱の一つとして一般教育演習の充実に力を

表 2.「問 9. 今も記憶している全学教育の科目名」の回答例

文学部	
・深海底	私は文系学生ですが，深い海の底で眠る生命の神秘に魅了されてしまいました。
・先端医療	自分の知らないことばっかりだったため。
・集団の中の心	演習形式で能動的に授業を受け入れた。
・フランス語（必修）	この先生との出会いがなければ言語の楽しさを知らない人生でした。
・学芸員から見た美術世界	美術館などの普段あまり行く機会のない施設へ行って，美術作品について考えることはよい体験になった。
・編集者という仕事	実際に企画文書を作るという手法が面白かった。
・平和の学際的研究	オムニバス形式の講義で，人類の普遍的問題である戦争・平和について，教育，法，物理学などの多角的視野から考察することができた。
・ことばとイメージ	先生が個性的だったことと，興味深い内容だったこと。
・古代日本史における諸問題	大学における「歴史学」とは何であるかに触れられた気がしたから。これをきっかけの一つとして他学部から文学部へ転部し，今は歴史学を専攻しているから。
・映画美学序論	今までに受けたことのない授業内容だったので。
・大学と社会	社会で活躍している卒業生の話は興味深かった。
・ショパンとポーランドの詩人たち	自分にとって初めて音楽を文学の視点から見る授業だったので。
工学部	
・工学倫理入門	自分の将来と関わりそう。
・ドイツへの情景	最も実のある授業だった気がするから。
・近代イギリスの社会と文化	講義の中で映画を鑑賞した。
・丸山真男を読む	少人数の授業だったため
・伝統中国の歴史と文化	自分は中国史をあまり知らないが大変興味がもてた。
・お酒の科学	話が身近だったから。
・がん―医学・生物学から人文・社会科学へ	多くの人はがんにより死ぬため興味があったから。
・会計監査と企業の不正	わかりやすく有意義だったから。
・心理学実験	心理学についてわかりやすく説明してもらえたから。
・怪物論	講義そのものもおもしろく，古代諸国の怪物についても学べたから。
・宇宙惑星科学入門	難しいけどとても興味深かったため。
・倫理学の視座	理解しようと必死になったから。
・メディアの中の子供	文系の人はアニメとかをもこんなに深読みするのかとおどろいたので。
・北海道大学の人と学問	北大についていろいろ学べて興味深かった。
・外国語としての関西弁	先生が良い人で，講義中も楽しい雰囲気でよかった。

注いできた結果の表れと評価できるからである。

6. 考察

6.1 教育目的との整合性

調査の結果によれば，コアカリキュラムは幅広い知識を身につけること，新しいものの見方に触れることなどにおいて高く評価されている（図 1）。スキルに関しては，総合的な判断力や文章能力の育成についてそれなりの評価が得られた。

カリキュラムの中心をなす「一般教育演習」や「論文指導」の最近の進歩には著しいものがあり，学生の評判も年々高くなっているので，現在のカリキュラムを対象とすればスキルについてはもう少し高い評点が得られるかも知れない（進化するコアカリキュラム 2007）。

コアカリキュラムは，

1）コミュニケーション能力の育成，
2）人間や社会の多様性の理解，
3）研究の一端に触れながら独創的かつ批判的な能力を養う，
4）社会的な責任と倫理を身につけること

を目標としている。また，全体を通して「社会参加を促し，生涯学習の第 1 歩を踏み出させる」ことを目指している。

評価は個々の学生の印象によってなされているので，アンケート調査のデータだけから教育の目的が達成されたどうかを判断することはできない。しかし，教養教育をひとわたり経験した学生が，その教育目的をどのように受け止めているかは推定できる。また，「印象に残った科目」などの記述欄には，コアカリキュラムが設定した目的に対するさまざまな反応が書かれているので，それらと合わせて考えると，コアカリキュラムの目的と学生の受け止め方との整合性が判断できる。コアカリキュラムの目標と学生の受け止め方の整合性は表 3 の通りである(注 1)。

この調査結果は，今後コアカリキュラムの内容を検討する上で，大いに参考になる。

6.2 教員としての技量は十分か？

調査結果の中で，ネガティブ評価の度合いの強い項目として，「奉仕的精神を養うこと」と並んで，「自分に自信を持つこと」があることが気になる。教養教育の目的が，専門分化した教育の前にさまざまな分野の学問を経験させて自分自身の才能に気づかせることにあるとすれば，この結果はその逆の効果を与えたことになる。大学に入学したばかりの学生は高等教育に経験が無く，一般にナイーブなので，学生に接する教員もそれなりに配慮して，注意深く教育にあたらなければならない。その意味で，教養教育の担当者には高い教育技術が要求されていると言える。しかし，実際には，上の結果だけからではなく，自由記述の内容からも教育技術を身につけていない教員が多く存在すると推定される（報告書）。

入学学生の資質を云々する前に，教育者としての

表 3. コアカリキュラムの目標と学生の受け止め方の整合性

＜目標＞	＜整合性＞
1）　コミュニケーション能力の育成	何とも言えない
2）　人間や社会の多様性	良い
3）　批判的な能力	何とも言えない
4）　社旗的な責任と倫理	悪い

技量を何とかしなければならないと思う。大学の教員は，それぞれのディシプリンにおける研究者としては訓練されているが，教育者としては資格の賦与がなされていないということが以前から言われていた。本調査の結果は，このような懸念を裏付けるものになった。試しに，自分の授業で以下のことを実践しているかどうかチェックしていただきたい。

- 学生に敬意を持って接しているか？
- 威嚇や脅迫を動機付けと混同しないか？
- 学生の名前と顔を覚えようとしているか？
- 早い時期にクラスの習慣を作り上げ，教室に温かい活気あふれる雰囲気をつくるよう努力しているか？
- 反対の立場の意見にも耳を傾け，質問をして，根拠のある議論を展開することにより，自分とは違うものの見方も尊重できるようにしているか？
- 授業の要点を明確にし，納得できるような具体的な実例を与え，明快な結論に導くよう毎回の授業を設計しているか？

これは「シカゴ大学教授法ハンドブック」（ブリンクリ他 2005）の中で教員の心構えとして繰り返し強調されている事項である。どの国の誰が見ても妥当な内容ではないだろうか？ およそ北海道大学の教員であれば，教室において学生と接する前に以上のことを「職務綱領」の一部として身につけて欲しい。

6.3 人間的なものを感じていない！

しかしもっと気になることは，奉仕的精神を養うことや倫理的なことなど，総じて人間性にかかわる質問項目に対する評価が著しく低いことである。この傾向は学部にかかわらず，おしなべて見られる現象である。教育の効果は相互作用の結果だから，このデータは学生が大学の授業に人間的なものを期待していないことを示しているかも知れない。逆に，期待していたが裏切られたということかも知れない。いずれにせよ，教育を提供する側はこれを根本的な問題として深刻に受け止める必要がある。

自由記述欄を通して読むとわかるが，学生はこのカリキュラムに人間性と総合性を感じていない。「なるほど，いろいろな学問がある，いろいろな先生がいる，いろいろな授業のやり方がある。しかし，だからどうなのか？ 何が言いたいのか？」という学生のつぶやきが聞こえてくるようである。

この傾向はわが国の大学教育に一般に見られることで，特にコアカリキュラムの欠陥とは言えないが，それで責任が軽くなるわけではない。この構造的な欠陥を克服するために，大学は全体として調和のとれた知的コミュニティであることを目指す必要がある。教養教育であれ専門教育であれ，およそ教育は「コミュニティ」感覚抜きでは成り立たない。例えば「サイエンス」は普遍的なもので，民族を超え，国境を越える性格のものと言われている。しかしその教育のためには，「サイエンスのコミュニティ」が現にあるか，あるいはバーチャルに想定されている必要がある。そのスピリットが無ければ，国境どころか自我さえも超えることはむずかしい。

これを大学入学直後の 1 年間を中心に行われる全学教育に引き戻して考えてみると，コアカリキュラムの戦略は，「北海道大学という知的コミュニティ」への参加を促すことによって，教育の目的を達成しようとしている（2006 年度「北海道大学の全学教育」参照）。そのために，札幌農学校以来の伝統が想起され，全学支援方式の教養教育の伝統が強調されている。

本学の教養教育が実体を持ち実効性を持つためには，教員は日常的に学生の教育について議論し，検証し，教育上の矛盾を解決しなければならない。その結果として生まれる大学のコミュニティが，自己にのみかかわり「個」の充足に留まろうとする学生の関心を学問や，芸術や，社会や，他者との関わりへと向かわせる。これが「高等」教育の始まりであり，入学したばかりの学生に対して大学がまずなすべきことだと思う。

7. まとめ

今回の調査で見いだされた最も重要なことは，北大に入学した学生の多くが，約 1 年間の教育を受けたあと自信を得ていないという点である。カリキュラムに問題があるというより，教員の基本的な素養に問題があるのではないかと疑われる。新入生に接

する前に，きちんとした教育研修を受けておく必要があろう。FD などがその良い機会となる。

さらに，目標として掲げているにもかかわらず，社会的な責任と倫理を身につけることになっていないことは問題である。カリキュラムやシラバスの再考など，組織的な対応が必要である。必須科目として倫理学を導入するか，いくつかの科目に数回程度組み込むマイクロインサーションなどの工夫が考えられる。

また，学生の特性や動向は年々変化しており，今後も在学生および卒業生に対する継続的な調査が必要である。

以上のように，この調査結果をもとにコアカリキュラムの構造的な問題を検討するとともに，今後のファカルティー・デベロップメント活動等に役立てていく必要がある。

参考文献

アラン・ブリンクリ他著・小原芳明訳（2005），『シカゴ大学教授法ハンドブック』，玉川大学出版部

有本章（2001），科研費研究報告書『大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究』代表 有本章（広島大学）

北海道大学高等教育機能開発総合センター進化するコアカリキュラム報告書編集委員会編（2007），『平成 15 ～ 18 年度特色ある教育支援プログラム『進化するコアカリキュラム―北海道大学の教養教育とそそのシステム―』』

注

1. 目標の 1）については，「文章で事実や自分の考え方を説明する力」や「プレゼンテーション能力」がポジティブ評価であるのに対して，「他人と議論する力」がネガティブ評価，「文章を読んで理解する力」がどちらとも言えないとなっていることから，全体として「何とも言えない」と判断される。目標の 2）については，ポジティブ評価された項目のほとんどが，この目標に分類されるので，「良い」と判断される。目標の 3）については，「価値観や社会観について考えること」がポジティブ評価であるのに対して，「他人と議論する力」がネガティブ評価，「批判的精神を持つこと」がどちらとも言えないとなっていることから，全体として「何とも言えない」と判断される。目標の 4）については，「奉仕的精神を養うこと」「社会的常識を身につけること」「倫理観を養うこと」がすべてネガティブ評価となっていることから，「悪い」と判断される。

資料１　アンケートの質問用紙の部分

北海道大学コアカリキュラムアンケート調査

○ あなた自身について

1. 所属する学部学科をチェックして下さい。

□ 1 文学部 □ 2 教育学部 □ 3 法学　□ 4 経済学部　□ 5 理学部 □ 6 医学部
□ 7 薬学部 □ 8 歯学部　□ 9 工学部　□ 10 獣医学部 □ 10 水産学部

2. 学科等の別があれば，その名称を記入して下さい。

3. あなたは大学 1，2 年次で北海道大学の全学教育を受けましたか？

□ 1 受けました → 質問の 4 へ
□ 2 受けません でした→ 質問の 7 へ

4. あなたは何年に入学しましたか？

□ 1 平成 14 年（2002 年）→ 質問の 5 へ
□ 2 平成 13 年（2001 年）→ 質問の 6 へ
□ 3 平成 12 年以前（2000 年以前）→ 質問の 6 へ

5. あなたは北海道大学の全学教育（理系学生に対する数学，物理，化学，地学を除く）の以下の科目の中のどの科目を履修しましたか？

□ 1 思索と言語　□ 2 歴史の視座 □ 3 芸術と文学　□ 4 社会の認識
□ 5 科学・技術の世界 □ 6 複合科目　□ 5 一般教育演習□ 5 論文指導
□ 6 覚えていない

6. あなたは北海道大学の全学教育（理系学生に対する数学，物理，化学，地学を除く）の以下の科目の中のどの科目を履修しましたか？

□ 1 人文科学分野　□ 2 社会科学分野　□ 3 自然科学分野　□ 4 論文指導
□ 5 総合講義　□ 6 一般教育演習　□ 7 覚えていない

○ 今の自分に対する影響について

7 あなたが受けた北海道大学の全学教育（理系学生に対する数学，物理，化学，地学を除く）または他教育機関における教養教育は，次にあげる項目に対してどの程度影響があったと思われますか。それぞれあてはまるものをチェックして下さい。

	非常に影響があった ←→ 全く影響がなかった
a. 幅広い知識を身につけること	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
b. 社会問題への関心をもつこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
c. 自然や宇宙への関心をもつこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
d. 芸術や文化への関心を持つこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
e. 自分の将来の方向を考えること	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
f. 価値観や社会観について考えること	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
g. 新しいものの見方にふれること	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
h. 社会常識を身につけること	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
i. 自分に自信を持つこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
j. 探求心を持つこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
k. 他者に対する寛容性を持つこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
l. 倫理観を養うこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
m. 奉仕的精神を養うこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5
n. 批判的精神を持つこと	□ 1... □ 2... □ 3... □ 4... □ 5

○ スキルの向上について

8 あなたは次にあげるスキルが，北海道大学における全学教育（理系学生に対する数学，物理，化学，地学を除く）または他教育機関における教養教育によって，どの程度向上したと思われますか。それぞれあてはまるものをチェックして下さい。

	衰えた　変わらない　やや向上した　向上した
a. 文章を読んで理解する力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
b. 文章で事実や自分の考えを説明する力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
c. プレゼンテーション（人前で発表する）能力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
d. 他人と議論する力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
e. 数理的な処理能力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
f. 知識と現実とを結びつけて考える力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
g. 論理的な思考力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
h. ものごとを総合的に判断する力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4
i. ねばり強くものごとに取り組む力	□ 1..... □ 2..... □ 3..... □ 4

○ 思い出とご意見

9 今も記憶している全学教育の科目名を一つだけあげて下さい。

10 教養教育およびコアカリキュラムについてご意見をお聞かせ下さい。